

医療現場で活用されるタブレット情報端末 その可能性とは？

どちらかといえば、ホームユースとしてのイメージが強いタブレット情報端末。しかし、その操作性の良さや持ち運びのしやすさなどから、医療機関などでは業務をサポートするツールとしても注目を集めています。ここではいち早くタブレット情報端末を導入し、研修医の教育用に活用されているむつ総合病院と、患者への説明ツールとして導入された梅岡耳鼻咽喉科クリニックの事例から、タブレット情報端末の業務ユースとしての可能性を探ってみます。

研修医の教育のために導入 「むつ総合病院」

むつ総合病院は、本州の最北端、下北半島のほぼ中央に位置する青森県屈指の総合病院です。下北半島における唯一の中核病院として地域医療を支えるとともに、もう一つの大きな使命は、新医師臨床研修病院として将来の医療を支える医師を育成すること。地方の医師不足が深刻化する中、その役割はますます重要になっています。

むつ総合病院がiPadを導入したのは、研修医の教育のためでした。専用のサーバーを設置し、添付文書を蓄積するなどの準備を進め、日本でのiPad発売（2010年5月）とともにシステムを稼働。第7期研修医として勤務する1年目の研修医8人に



いつでもどこでもiPadを持ち寄りカンファレンスを行う。
（写真提供むつ総合病院）

iPadを1台ずつ貸与し、30種類にも及ぶ治療マニュアルや治療に関するガイドライン、薬剤の説明、勉強会の資料など、臨床研修に必要な資料を院内のどこからでもすぐに見られる環境を整えました。

その場で調べ、患者からの 質問対応・説明にも活用

「調べものにかかる時間をできる限り短くして、1分でも長く患者さんと向き合う時間を増やして欲しい」。

iPadを導入した目的について、むつ総合病院の坂井哲博副院長はこう語ります。紙ベースの資料では目的の情報を探



続々と登場している
タブレット情報端末。

すのに時間がかかりますが、iPadなら検索すればすぐに目的の資料を見付けられます。ノートパソコンでは気軽に持ち歩かず、システムが起動するまでに時間がかかります。また、以前はスマートフォンの導入も試みたことがありましたが、画面が小さく定着しませんでした。

iPadは手軽に持ち歩ける軽さで、数秒で起動。画面が9.7インチと大きく、院内で今まで使用していた書類（ほとんどA4サイズ）が、そのままのフォームで閲覧できます。しかも、バッテリーの持ちが良く、立ったままでの操作も可能です。

研修医は、例えば患者から投薬についての質問があり、分からないことがあってもiPadを持ち歩くことでその場で調べられ、答えることができます。また、治療方法や病気の説明でも、iPadの画面を見せながら説明すれば分かりやすく、患者にも高い評価を得ています。

後で調べる、確認するということがなくなり、患者と向き合う時間が増えることで、所期の目的どおり研修プログラムの質の向上につながっていると言います。

むつ総合病院では、今後は研修医の教育だけでなくiPadを院内のナースステーションやリハビリステーションなどに配布して、多忙な医療現場の支援に役立てることも計画しています。さらに、将来的には地域の診療所や薬局との連携にも活用することも模索しています。

患者目線の説明ツールとして活用 「梅岡耳鼻咽喉科クリニック」

梅岡耳鼻咽喉科クリニックは、2008年9月1日に兵庫県西宮市苦楽園に開業。以来、「丁寧診療と説明」、「明るく丁寧な対応」、「待たせない」をモットーに地域医療に貢献しています。花粉症やアレルギー性鼻炎、中耳炎といった一般的な耳鼻科系疾患をはじめ、いびき・睡眠時無呼吸症候群（SAS）などの呼吸器関連の疾患や、専門性の高い甲状腺疾患の検査・治療を提供しています。



カウンセリングルームでiPadを使い、病気の説明をする。

世界一細い内視鏡などの最先端技術の導入をはじめ、待合室や中待合室、ネブライザー室では計4台のモニターで病気の説明の動画を流すなど豊富なITツールを活用して症状や治療についての情報発信に力を注いでいるのが、このクリニックの特徴です。その一環としてiPadを日本での発売後すぐに4台導入。主な病気とその治療方法を説明するコンテンツを梅岡比俊



iPadのための院内ネットワーク「院内wiki」の画面。
（写真提供むつ総合病院）

院長みづからが制作しました。そのiPadを使い、カウンセリングルームで説明を行っています。また、炎症を抑える超音波ネブライザーでの治療中も、患者が自分で見られるようにしています。



梅岡耳鼻咽喉科クリニックの梅岡比俊院長

「鼻や耳、喉といった体のデリケートな部分を扱うだけに、患者さんの理解が不可欠です」というのが、梅岡院長の思い。iPadは誰でも簡単に操作できるので、スタッフが説明ツールとして使うだけでなく、患者が自ら操作して見ていただくことでより理解が深まると言います。パソコンが苦手な高齢者の方も、iPadなら簡単に操作できると好評を得ています。治療はもちろん、情報提供も患者目線という、院長の思いがiPadの活用につながっているようです。

院内システムとの連携が 今後の課題

総合病院とクリニックのiPad活用事例を見てきました。どちらもまだ導入されて日が浅いため本格的なシステムとしての運用はされていませんが、iPadの特徴である誰にも簡単な操作性、持ち運びのしやす

さ、広くて美しい画面を活用された使い方をされています。

今後の展望で注目されるのは、院内のシステムと連携したネットワーク端末としての活用でしょう。それにはiPadに対応したシステムの構築や情報セキュリティの強化などが、今後の課題となります。また、iPadは医療用のアプリケーションが充実してきており、その数は既に4000種類以上と言われています。そうしたアプリケーションの充実もiPadの普及の弾みとなるでしょう。

iPadをはじめとするタブレット情報端末の普及は医療機関をはじめ、ビジネスの世界にも大きなインパクトを与えることは間違いなさそうです。

DATA



**一部事務組合下北医療センター
むつ総合病院**
病院長：小川克弘氏
診療科目：内科、外科、産婦人科など計22科
病床数：486床
所在地：〒035-8601
青森県むつ市小川町一丁目2-8
電話：0175-22-2111
FAX：0175-22-4439
ホームページ：http://www.hospital-mutsu.or.jp



梅岡耳鼻咽喉科クリニック
院長：梅岡比俊氏
診療科目：耳鼻咽喉科・小児耳鼻咽喉科・アレルギー科
所在地：〒662-0084
兵庫県西宮市樋之池町22-2
電話：0798-70-3341
ホームページ：http://www.umeoka-cl.com